

軍歌の調べを心の支へに

時折、軍歌を高唱したくなる瞬間がある。酒に酔ったときばかりではない。突然、心の奥底から、怒りとも悲しみともつかぬ感情が迸り、軍歌の調べが口を衝く。

私が軍歌を初めて聞いたのは、中学生の頃、今から十年以上も前のことであつた。友人の祖父が購つたといふ一本のカセットテープ。「正調海軍軍歌」とタイトルの付されたそのテープには、『同期の桜』から『海ゆかば』まで、様々な軍歌が収録されてゐた。忽ちにして軍歌の虜となつた私は、図書館からCDを借りて来ては、テープに録音した。一方、流行歌などには、目もくれなかつた。その甘さが、たまらなく不愉快だつたのである。

学校の教育方針に影響されたわけではない。それは、むしろ正反対に近かつた。在学してゐたのは、「自由闊達」を標榜する中高一貫の進学校であり、「リベラル」を自任する教員が多かつた。現代文のテキストには、丸山眞男や加藤周一が用ゐられ、日本史の授業など、「大日本帝国の蛮行」に関するプロパガンダ以外の何物でもなかつた。それらのドグマを素直に受容したなら、軍歌を愛唱するなど、決してあり得ぬ選択に違ひない。けれども、生来の偏窟さゆゑ、そして何よりも、ある原体験が私の選択を決定づけてゐた。

小学校高学年の時だつたらう。テレビの政見放送を何気なく見てゐた私は、薄くなつた白髪を振り乱しながら、ダミ声を張り上げる老人の姿に釘付けとなつた。彼の名は、赤尾敏。《大日本愛国党》の総裁であつた彼は、銀座・数寄屋橋における辻説法で知られてゐた。演説の具体的な内容は何一つ記憶にないが、その存在感に極めて強い衝撃を受けた。

いつの間にか、私は、「右翼」少年を気取るやうになつてゐた。中学受験の準備をしつつ、歴代天皇の御尊号を暗記した。東大駒場キャンパス近くの中学校に進学すると、教育勅語の暗誦を試み、社会の授業では、大日本帝国憲法の歴史的意義を主張するレポートを書いた。当時は、『戦争論』や『国民の歴史』などの便利な著作は存在しなかつた。そのため、「戦後」民主主義（ヤルタ・ポツダム）体制の中で、「世に背く者は背く者の流派に、生かしかげな安住の宿り」（三島由紀夫・『英霊の聲』）を営んで恥じない—自称「進歩主義者」との論争を通じて、思考を紡ぐことを強ひられた。

とは云へ、今にして振り返れば、それはよい経験であつた。如何なる正論であらうと、それが従ふべきドグマとして示された場合、権力主義的に機能しかねないからだ。「戦後」的思潮を自主的に疑ふ契機を与へてくれた点については、「自由闊達」な校風に感謝してゐる。

無論、身近に先達がゐないのだから、容易に学習は進展しなかつた。それどころか、どんな文献にあたればよいかの見当すら付かぬ状態であつた。取り敢へず、書店や図書館に足を運び、「国家」・「民族」・「戦争」に関連しそうな本を読んでみた。だが、あるものは生理的に相容れず、あるものは難解に過ぎて、あるものは金銭的に手が出なかつた。

しかし、「京都学派」・「保田與重郎」・「新右翼」といふ三つの言葉が、脳裡に刻み込まれた。高校三年生の晩秋、「新右翼」のリーダー的存在だつた野村秋介の自決直後に開催され

た一母校の文化祭で、『現代の超克』といふ討論会を企画した私は、「京都学派」の気風に触れるべく、京大への進学を堅く心に決めてみた。

云ふまでもないが、それは安易な発想だつた。「京都学派」の何たるかも、全く理解してゐなかつたのだから…。かの『近代の超克』座談会にすら目を通すことなく、廣松渉の『〈近代の超克〉論』に引用された—「近代の超克といふことは、政治においてはデモクラシーの超克であり、経済においては資本主義の超克であり、思想においては自由主義の超克である。」といふ鈴木成高の言挙げを以て、「京都学派」の基本思想であると思ひ込んでみた。況や、大学の現状など、知りもしなかつた。

それせいか、一浪して潜り込んだ京大での生活は、退屈極まりなかつた。講義に出席する意欲も湧かず、単位も揃はなかつた。同じやうな憤りを胸に秘めてゐる者もなく、軍歌を聴きながら、孤独な時間を送つてみた。所属学部を移つて見たが、根本的な解決とは思へなかつた。

その頃、友人から、『読売論壇新人賞』の存在を聞き、日頃の鬱情を原稿に叩きつけた。入賞するなど、想像だにせず…。